

那智勝浦町色川地区



地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える（興味関心に応じて）地域をフィールドに、それぞれの知見を深め、価値を創出していく



色川地区について

那智勝浦町色川地区は、那智勝浦町の中心部から山間部へ車で30分ほど走った所に位置する、9つの区から成る、人口が300人ほどの小さな地域です。かつて盛況していた鉱業が1970年代に廃止となり、地域の人口は外部へと流出していきましました。しかし、同時期より外部からの移住者を積極的に受け入れ、現在では地区全体の人口のおよそ半分を移住者が占めるまでになりました。ただ、LIPの活動を主に行っている小阪区は、他区と比べ移住者は少なく、その代わりに地域の行事や風習が比較的残っている地域となっています。地域資源としては、美しい棚田や茶畑が有名であります。特に「小阪の棚田」は、一度休耕田となった棚田を移住者を含む地域住民が主体となり再興させ、現在も関係人口の方々などを交えた保全活動が定期的に行われています。



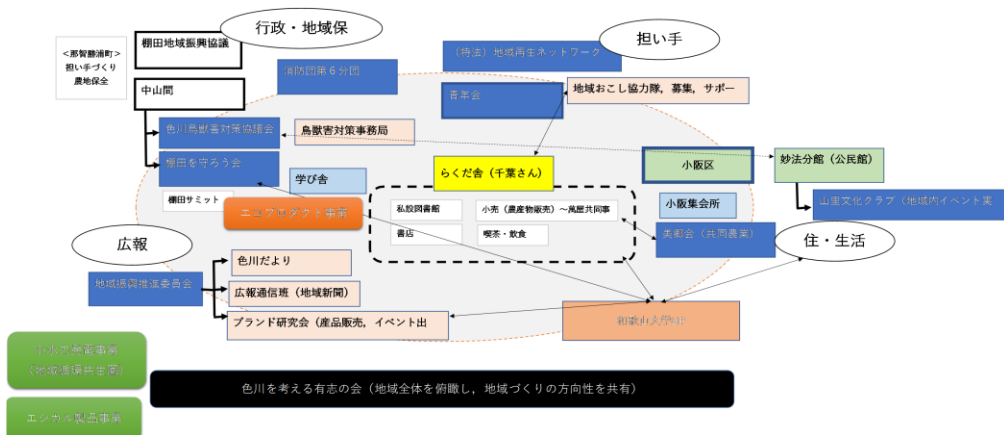
色川地区でのLIPについて

2016年度から活動を行ってきた那智勝浦町色川地区におけるLIPは、色川ならではの行事や風習への参加（フィールドスタディ）を通し、学生の知見を深めることを中心に活動を行ってきました。また、活動を通して「学生が感じたこと」を地域住民に発表する場を設けることで、住民のいわゆる「鏡効果」醸成にも寄与してきました。2021年度は、これまでの活動をベースにしつつ、棚田などにまつわる地域の課題解決に向けた具体的なアクションを起こすことで、地域の課題を「自分ごと」にする取り組みも予定していました。

2021年度活動報告

2020年度の活動は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画通りの活動を出来ませんでした。しかし、現地を訪れなくても出来る活動を考え、実行することで、学生の学びを深めました。

移住者の暮らしからの学び



9月30日、那智勝浦町色川の移住者である千葉さん、和歌山大学の八島先生、学生の鈴木の3人で移住者における地域活動の見える化を行うワークショップを開催しました。上記の図からも分かるように移住者の地域活動はかなり複雑であり、地方に住むということは、地域の一住人として様々な地域活動に携わる必要があるということを知りました。

千葉さんが携わっている地域活動は、①生業である「らくだ舎」の活動や地域の広報としての活動、②地域活動（保全や行政）としての活動、③地域で暮らしていくための活動、④地域の伝統や文化を残していく担い手としての活動の4つのまとまりに分けることが出来ました。

色川を中心とする地域交流からの学び



2021年4月、色川地区と和歌山大学の共同活動として「色川ビールプロジェクト」は誕生しました。色川地区の一部では生活用水として用いられている「神聖な那智滝の源流水」と、色川で収穫することが出来る様々な産品を組み合わせ「色川ビール」を醸造しました。コロナ化でオフラインの交流が出来ない中、色川に実際に訪れずとも「色川との繋がり」を感じる事が出来るようなビールを作成しました。実際に色川住民や那智勝浦町民だけでなく、和歌山県内外の多くの方々にビールを通じて色川の魅力を伝えることが出来ました。